宍粟郷土研究会報
No. 28
42. 8. 20
兵庫県宍粟郡
山崎町
教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話 750番

平瀬長水の『射学要録』(三)

島田 清

戦場射事の部

一矢文射様ノ事
一雲張ノ事
一太刀抜テ弓取扱ノ事
一後殿(しんがり)繰引ノ事
一楯ヲ持来ル敵、射様ノ事
一幕内ヘ射様、射出様ノ事
一軍射六曲ノ事
一立浮沈ノ足遣様ノ事
一戦場ノ射、目附処ノ事
一敵合身ノ規矩ノ事
一戦場先後詞ノ事
一戦場ニテ弓納様ノ事
一乱軍ニ射士立処ノ事
一楯裏射様ノ事
一竹束裏射様ノ事
一野中ノ幕並射透様ノ事
一割膝、胄割、大指割ノ事
一戦場ニテ足ノ大指ヲ折ト云事
一矢番早キ射様ノ事
一鎗脇射様並一番弓ノ事
一鎗脇ノ弓、間合ノ事
一鎗・薙刀合ノ弓ノ事
一矢所、見足ル事
一相引互弓合ノ事
一中拳(あたりとぶし)ノ事
一鎗脇ニテ矢ノ放チ処ノ事
一弓ヲ鎗ニ用ルト云事
一戦場弓矢取扱ノ事
一戦場一筋矢ノ事

右共、討二百箇条

附録

或問五条

一堂射稽古、当日益不益ノ事

目次

平瀬長水「射学要録」……島田 清……1
前野道素翁を想う……安井 寅一……2
郷土館と考古出品に就いて……福井 託二……5
風月集と素練……多淵 健次……6
岡山見学旅行記……11
会員名簿(23)……12
雑報……12

一射芸ノ古ヘニ劣リタルヲ復スベキ道アリヤノ事
一何ノ流派ニヨリテ学ベキヤノ事
一弱弓ハ戦陣ニ益アルマシキヤノ事
一射書ノ書目ト其可否ノ事

射学要録　目録終

（未完）

前野道素翁を想う

安井寅一

自分の地位を向上し確保するとか、名誉や財物を得るために努力をし勉強すると云う事は一般の人間が誰も実行する事でありますが、自分を度外視してひたすら庶民の幸福を祈り、更に自分を犠牲にして之れを指導して行くと云う事は中々に出来ぬことである。

道素翁はこの誰にも出来ない事を平気でしかも恬淡たる気持で立派にやりとげた稀に見る人であつた。名は善次郎字を道素、士行と号し、嘉永二年一月四日山崎町に生れ、二十才にして先考の後を受け、北門前屋（酒造業）を継がれた人である。若き時より向学心強く、林田藩の儒者河野鉄兜先生に師事して学を修め、師の高風に薫化された。後家業の余暇に心学を研究、更に国学和歌にも造詣深く、又茶道も奥儀を極められたという。元山崎に閑静な九樟亭を建設され風雅の道に浩然の気を養はれて居た。時々儒者、画家、茶人、歌客など来訪する者があり、翁は喜んで比人等と歓談された。

大酒造家の青年主人として我世の春に立ち乍ら贅沢と無駄を排除して、翁自から木綿の衣服筒袖を常用し、使用人は元より町民にも之を推奨され、更に勤倹力行の風を実践範を示された。其一として零細の貯金の集積が勤倹社の創立となり明治弐拾弐年自家の支店に営業所を開設して其社長となられた。後の勤倹銀行であり、郡内金融機関の先駆者として活躍、後年宍粟銀行に合併した。

翁は又各種の会合には勤めて出席され講話されたが、漢籍の古語、心学を主題とせらるゝ事が多かつた。作歌も花鳥諷詠よりは寧ろその日の出来事、或は強く感じられた人事を詠ぜられたものが多かつた。

還暦の祝いに大阪文楽一座を招き、町民に無料公開して町民をアッと云わせて満足せられたとも聞いて居る。社会奉仕的の事は数かぎりも無いが、明治三十四年五月興益会を作り其会長として、時間を厳守する事に先ず手をつけ、自

身その実行模範を示された。山崎の葬式時間の厳守は全く翁の指導が功を奏したものゝ一つである。

翁の生活態度は実に真面目であつたが、一面所謂砕けた所もあつて、能狂言の役者に扮して実演も度々せられ、見物の人を喜ばされたものである。町内祝典賑いの余興などには、一人で二輪加して町廻りされた事もあつた。こゝらが翁の特別の存在であつたかと思う。庶民に溶けこんで其実態を知り、善導すべき道を開くべく考えられたのであるまいか。

明治三十二年十二月山崎町長第一期の時より、小学校の終業式の日に毎年翁自身講堂に出向いて、生徒一同にいろは訓歌（自筆木版刷画賛）を配布、その歌を主題として講話をされた事も有名で「い」より「ら」まで二十二年間翁逝去の年まで続いた。

大正二年六月に山崎青壮年有志にて精神の修養と弁論鍛練の会を作つた。自分も其会員の一人であつた。翁は会長を承諾され友施会と命名せられ、爾来翁逝去の日まで七十歳に近き翁が、二十歳より三十歳位の若者と毎月二回必ず席を同くして訓話をせられ、会員の講演を愉快げに聞かれた。この事も翁の人を育てるという広大な精神のあらわれでないかと思う。昭和三年に会員相謹り翁の銅像を最上山に建設したが、大東亜戦に応召供出して銅像は無くなり、其後はいろは訓話の「ち」の一首を銅板にとつて建碑し現在に至つている。

翁の幾十年の日記には自己身辺の外、町内の出来事など細かく記載されてあるものを抜萃して末記に掲載いたしますが、これは山崎町の歴史を知る参考資料になると思います。翁は此日記を逝去の一週間前まで記載されています。

最後に翁逝去の四年前に自書せられた遺書に、葬式の事として明細に指示、質素を旨とし虚礼を廃するようにと条項書きにされ、墓碑も翁生前に建立、道素日勤居士と自然石のもので、翁の碑としてはやゝお粗末に感じられる。かくの如く翁は死後のことまでも深く配慮されていたのである。

今年は翁逝去の五十周年を迎へ、親しく翁の指導を受け厚情を賜つた自分として翁を欣慕するのあまり老筆を執り思い出のまゝを綴りましたので御判読願います。

☆道素翁日誌の抜萃

☆明治十五年五月九日（最初の日誌）

神戸村一の宮昇格祭典に付、しま女つや女兼吉藤吉参

詣、太吉支店行母公愛吉次郎吉はる女茶摘、同夜山下宅にて浄瑠璃、同夜本家老人怪我、本日午後主ぬい猪三郎重平四人丈け店も閑なり。

☆明治二十二年四月二十五日

新町会議員選挙（町村制最初の議員）

二級選挙　岡本　新　竹原　盛哉　安原武五郎

妹尾新次郎　大霜孫十郎　庄　重巽

一級選挙　前野善次郎　志水　与吉　志水　源一

藤木　清平　谷口志男治　塚田　治平

新議員諸君に告ぐ

ひたふるにたのみしおれは頼まれて

起ふし安くまもれ君たち

☆明治二十三年一月二十日

八幡神社にて本年国会開設に付天下り無事の祈念

四つの海波なたゝせぞ国を思ふ

まこと心の神ならば神

☆明治二十六年七月十日

大阪市東区博労町岡本市良兵衛先生を招聘し心学道話を開会す、但支店にて午後一時聴衆四十八名、夜一座光泉寺本堂にて立錐の地もなし。

☆明治三十二年八月二十九日

昨日の大暴風雨は五十年来未曽有の強風、山崎町にて倒家八軒街道は瓦の欠等にて足の踏所もなし、郡内損害夥敷人心恟々

圧死亡　九、　負傷　十三、　倒家　五百戸、

半倒　二百八十戸、　大破　千二百八十戸

☆明治三十六年九月二十四日

妙勝寺内に一石一字塔を建立

表　法華経一石一字塔

横　浄雲宗精信士　智行妙清信女　為二百遠忌

横　明治三十六年十一月　前野善次郎　前野保次郎

書写建之

裏　六万九千三百八十四字

☆明治三十九年十二月二十二日

有名なる金森通倫氏が朝日座にて勤倹貯蓄の大演説があつた。

☆明治四十年四月二十六日

勤倹銀行創立二十年祝宴　株主不残

郡　長　神　原　清太郎　殿

税務署長　藤　原　武　蔵　殿

登記所長　保　井　兼太郎　殿

郵便局長　志　水　秀　吉　殿

高　齢　者　松　平　正　路　殿（八十三才）

☆明治四十一年十月四日

尽七日寺詣り女中客、母上去り絵いし日より毎朝怠りなく墓参し今朝墓前に額づきて

日こと訪ふ御墓詣もかぎりなし

去し母上こん月をまて

☆明治四十四年八月四日
旧藩主本多家の御養子本多渉殿、志賀重昂殿と共に御来崎あり

☆大正二年六月十五日
友施会発会式出水町倶楽部にて
来賓　町長　山下勢太郎氏　校長　多賀貫一郎氏
新聞通信員　山下駿治氏
会長　前野善次郎　幹事　妹尾金五郎
幹事　安井寅一　幹事　松本市二郎
会員　二十七名　中々の盛会

☆大正六年四月三十日
本月二十五日より三十日迄当山崎町旧郭内草葺家調査
山田町　八棟　本町　十四棟　西新町　七棟
荒神前　四棟　北魚町　七棟　福原町　六棟
寺町　九棟　紺屋町　十一棟　伊沢町　七棟
出水町　八棟　講社筋　六棟　裏の町　七棟
計　九十四棟

☆大正七年十二月二十一日
咽喉午後三時より閉し、山中氏注射にて飲食する。
山陽自動車本日より山田町停留所開始
奥村氏と上西氏とは、はがき遣す。
註　翁此日突然発病、同月三十一日京大病院にて逝去せらる。

郷土館と考古出品に就て

福井託二

私達が多年実現を待望して居ました町立郷土館が完成して、今年陽春四月折柄の桜花満開の好日を期して開館、観覧が出来る事となつたのはわが郷土の為に大変喜こばしい事であります。三日間の記念開館中は、立錐の余地もない程の盛況でした。この郷土館の環境は、将来町の文化センター地区として約束されて居る。小学校跡で、元本多藩旧城内の中央部に地の利を占めていることは、町発展の一連事業としての観光資源の随一である事は申すまでもありません。

展示陳列されたものは、旧藩主本多侯の武具家宝類と八幡神社社宝が重なるもので、其配列は運営委員の方々の

名声四海にとどろく
清酒
山陽盃
壷阪酒造
電六三

新築店舗
商品も新鮮
静の家食料品店
本町 電四二八
サービスも万全

々ならぬご配慮であつたと感謝しています。こゝで甚だ僭越ながら一言私見を申上げたいと思います。只今の展示出品物は素より結構でありますが、郷土の考古学的な出土品は、銅鐸の外は皆無という状態で誠に残念であります。私等の居住して居る土地に昔住んでいた遠き祖先が遺した貴重な出土品は、郡内各所に散在秘蔵されて居る事を聞いて居りますので、係員の方々も一層ご努力下さいまして現在所有されている方に依託出品を勧誘お願いして頂けば、相当の出品はあるものと思います。更に郡内に残つている貴重な古墳もそれぞれ合法の手続をとつて、発掘すれば予想以上の収獲があるのではないでしょうか。郷土の考古出土品が数多く有るということは、それだけ郷土館の持つ意義も有意義となり、引いては郷土の青少年達に愛郷心の昂揚と良い意味の懐古趣味の培養に役立つことゝなるでしょう。郷土館に地元の出土品が出ていないということは、何としても淋しい限りであります。いつの日かこれが願いを実現出来て数多く並べられるであろう。遠き祖先の遺物出土品を前にして、これを受つぐ我等と新旧相対して無言に限りなき機縁を喜び合うのもそう遠い日ではないと確信して居ります。

風月集と素練

多淵健次

一、緒言

享保十年に生まれ、安永七年に没した江戸の俳諧宗匠、旨原の発句と文を編集したものに「風月集」という書があるが、ここに紹介する「風月集」は右の書とは無関係である。

昨年のある日の朝、通勤途上のバス中で、古色蒼然たる一冊の木版本を借りる好機に恵まれた。爾来余暇を得る毎に、出来るだけ原本の趣を現わすよう、ペン書きではあるが、克明に模写した。

幸い第二職員研究紀要の編集されるに当りその一隅を借りて之を世に紹介したい。従つて私のは研究などと称するものではなく、単なる紹介に過ぎない。ただし紙数制限の為、その全貌を明らかに出来ないことをことわつておかね

ばならない。

二、風月集の編集主旨

風月集にはまず「叙」文がついているが、その終りに近い次の文章によつてこの書の主旨は一目瞭然である。即ち

「ことし寛政子のとし（寛政四年一七九二年＝筆者註）祖翁百回の遠忌を取越たまふ播陽四睡の精舎に追善の法席を敷玉へる折からその門下の阿丘蝶翠孤月仙斧の輩、牌前に花鳥月雪の風莚をのへ兼て四方同門の風子より四季に四句を求め集めて風月集と名づけこれを桜木に寿なかうせんとせらるるよしほの聞えぬ」なおこの叙文の作者は最後に、

「贈るものハ誰や東武三溪の野納阿仙也

寛政丑弥生」

とあるにより、武蔵国三溪に住む俳号を阿仙という僧であることはわかるが、目下それ以外は知るよしもない。

三、風月集の形態と構成

A　形　態

1.　縦二二、五糎、横一六糎

半紙袋とじ、表紙など含めて六十七枚

2.　表紙は百七十四年の名残を留めて、茶色にやけ、中央四糎巾ほどの答題紙を貼つた跡稍白く、その上部に「月」の字と、中央部に処々消えているが、「集」の字であつたと思えるものとが認められる。「風」という字は剥落したらしい。

3.　中表紙にはすべて枠で囲み

右に「芭蕉翁追善」

左に「西播宍粟

四睡奄素練選」

中央に黒地に白く大きく

「俳諧風月集」とある。

B　構　成

1.　初めに阿仙の「叙」あり、

2.　次に全篇を「花」「鳥」「月」「雪」の四部に分け、花ー春、鳥ー夏、月ー秋、雪ー冬とそれぞれ百八十数句の俳句を収録している。また各部の前の一頁には簡単な風景画に、芭蕉の一句を配して各部首を飾つている。

その句は、

仕出し弁当

きくや

北奥町戎神社南　電二一九

木の本は汁も鱠も桜哉
郭公きへ行かたや嶋ひとつ
雲おりおり人を休める月見哉
いささら八雪見にころふ所まで

である。

3. 各部の最後に芭蕉の句を発句とした、素練とその門下とによる歌仙一巻が添えてある。

4. 全篇の終りに「備祖翁牌前」の前書があつて「香」「花」「燈明」「供物」「読経」の語の次にそれぞれ一句があげてあり、

5. つぎに素練の「発願文」を附し、最後に「追加」として一人の俳句それぞれ四句、二人計八句を追記しているが、これは恐らく編集も終つてしまい出版元へ草稿を廻してから、句が撰者の処へ来たものであろう。

6. 出版元は第六十四丁の中央に次の様に記してある。

皇都寺町通二条
蕉門書林　橘屋治兵衛梓行

四、風月集の内容

内容採録　凡例

1. 「花部」には作者名の右肩に住所が記してあり、その左に続いて住所名の省いてあるのは右の住所名と同様と判断されるが住所名ある作者はなるべく花部では省かないようにした。

2. 「花部」で省いた作者は「月部」以下のどこかで採録した。従つて全作者につき一句以上は必ず載つている。但し選者素練のは全部載せた。

3. 詞書のついているものがまゝあるが、省いたものもある。

4. 各部の終りにある歌仙は紙数の関係もあり、「鳥部」のだけを載せた。

この形式は蕪村の「春風馬提曲」に通ずるものであり、また文芸的価値は劣るとも、野趣の溢れた面白さを持つている。

5. 叙文は省いた。

6. 変体がなと異体字は現行のに改めたが、語法上、表記法或は用字法上誤り又は不充分であるものも、原本通りとした。

花部

日の影に我と際つく桜かな　東武巣丘
ものの咎したまふ宮そ梅の花　六幽
花のためそこらを残せ若菜畑　祇東
散さるる鐘を取巻さくら哉　川耳
散花や奇石に結ふ浜の水　綾人
摘草の腰延しけり花の山　平羌
女桃葉

山吹や水も光沢もつ細流れ　ちか
紅梅の日影を守る椿かな　東部三溪
また枝の間〳〵寒し初さくら　蛙吹
連発や只の梢をちからにて　素幽
吹ちらハそのまま夏そ花の雲　阿仙
しら藤や滝浴て居る松もあり　素梵
笠脱けハここら野菊の匂ひ哉　千花
学寮に欠ひの音や遅さくら　井蛙
迚も世ハ捨られぬなり花盛り　柳琵
花に馴て戸障子さしぬ山家哉　双鳳
歌よまて見る人花を盗けり　但馬村岡
花ちらハ何とてくらす片山家　和田竜山
行道ハおほろ月なり桜かり　此行
つもりつもり流るる花の筏かな　和田山五友
花よりも松のおほろや手向草　柳瀬寿硯
思ふそよむかしを今に志賀の花　竹田魚潜
花の香やいつまて薫る旅衣　丹後和田東翁
少魯也是そ美人の花曇り　女阿秋
手の花ハ皆奪れてさくら哉　釣掌
石垣の透間〳〵や菫草　丹波桟敷可耕
見せふとて明はなしたか略次の梅　越後鱈田一合庵
峯の松みねへ戻して汐干哉　倚林
硯水ほとの流れやつくつくし　備前岡山市燕
古池や去年の落葉に啼蛙　互考
こころなの風かと見れハ胡蝶哉　静波
春の雨花の木舎に舎りけり　文穂
さらさらと手にも溜らす糸桜　仙台秋佐
雨の日ハいとと重たき椿かな　歌梁
坂道やひと本谷のんめの花　安芸広嶋等花
麦畑に道の無理なき花見哉　但馬村岡巨泉
気をつけて見れハ枝あり花の山　名古屋山甫
よけて吹け五風十雨も花のうち　三河御油友山
真盛り空に知られて花くもり　御馬鷺雪
白妙ハ雪の恵みかんめのはな　牛久保咫石
幾人の意馬いなくや華の山　西方子好
前帯を羨れけり花の山　本宿美山
夕顔の宿よりゆかし垣の梅　宮崎二水
梅が香や人もの言ハぬ明屋鋪　羽栗叢臥
欺されて傘の用意やはなの雲　西郡洛霞
相模小田原有隣

自動車は三菱とホンダ
丈夫で長持ちします
深川モータース
TEL山崎 五二〇 六九五九

雲の帯して明にけり山桜　尾張　秋竹
投入て風を休める柳かな　名古屋　獅宝
鶯のとふても催ふはつ音哉　蓮阿房
紅梅や下向に拝む二王門　逸筆房
にくさよな鐘ハ氷らて花ふふき　浪花　其柳
洛素竹

播州

空を縫ふ華の浮木や糸桜　安志　牧薗
しののめの明安く見ゆ躑躅山　九鶴
瓢箪の口音高し山さくら　姫路　麗甫
淀鳥羽や車四五輛ももの花　五川
三芳野や書ぬ短冊花の随意　葛野　唯鳩
風鈴の音に溢るる桜かな　前之庄　花悦
笈の戸もひらくや花にひと休ミ　乃井野　遊糸
薄雪に梅の朧夜月の花　多賀　石瓦
一連ハ夜に入る華の峠かな　赤穂　仲七
西山や遅き日をまた花明り　松本　逸貫
松風に際たつ花の嵐かな　高砂　布舟
遅ましい男も居るやんめの花　乃井野　其柳
なかはより上ハ雲なり花の山　文蛙
顧るあと一しほや夕さくら　竜野　雨隣
寝てつほミ起て開くや梅の花　苅屋　池廻
月影もうたかふ色やはつ桜　加古川　帰一木
山陰や里ありと思ふ梅の花　大塩　白鳥

紳士服専門の
ワシノ洋服店
町原
福電116

寺もあるかと問せけり山さくら　前之庄　莞爾庵
簸陰に後れて梅のさかり哉　吉田　指海
長日のしをりハ長し藤の花　田尻　谷翠
松に夜ハ残るや花の朝ほらけ　北条　石蘿
奥山に誰か契り来てはつ桜　佐用　鶯里
谷も浅ふ咲うつミけり花さかり　背崎　空有
松山の干潟らしさよ花の浪　舟渡　魚淵
一あらし筏に積や花のゆき　平野　栗郷
紅梅やこころ解たる春の色　新宮　金雨
頭布とハ老の勇気や花の中　出石　観然
野遊びに果のついたる桜かな　岸田　亀有
芳しき風のはしめや梅の窓　安黒　古人里
痩畑のへりに這ふてや木瓜の花　神戸　民止
其流れ今に慕ふや花かたみ　曲里　除角
鶯の声とりひしくや斧の音　斎木　一習
菜の花や野辺に長閑を咲埋ミ　福野　好之

にこにこと長閑に咲や梅の花　柳糸

花に手を曳れて出ぬ女中連　三方竹布

ひと本をいく度めくる花見哉　山崎梅里

くまとりを松の手伝ふ桜かな　一得

海棠の覚た目付や雨の後　亡女琴水

八重梅やまた転寝の裾寒し　蓮子

頓て茂る尾を延しけり藤の花　蝶翠

谷水のつかひはしめをさくら哉　仙斧

うつくしい顔をしていて鬼薊　阿丘

一日の栄花も尽んとする時又五十年の楽を
そへて風もいとわず鐘も恨みす心の花こそ羨し　孤月

酔ふした忠度もあり花の陰

五十波山の半腹に八幡まします堂ハ
人跡まれなれハいとと神寂て世塵を
払へり松杉四方より包み花の白妙は
朧朧として青空を覆ふ巌より落る

とくとくハ夜の音にかよいける宮に集る
人人ハ遍山の曲突に孫晨か敷ものを
借りて思ひ思ひの風流こそ二千金なるへし
桜咲くあたひや宵の気色より　素練

（未完）

岡山見学旅行記

五月十四日本会春季見学団百五十人が三台の観光バスに分乗して山崎を出発したのは六時半カッチリであつた。幸に快晴に恵まれ一同大張切りで国道二号線を走破して、備前岡山藩主池田侯の菩提寺である『曹源寺』へ九時前に到着。松並木道を通りて見上ぐる二層大山門前に下車、寺を訪ふと前以て依頼してあつたので住職自らの御案内説明に境内を見学した。本堂、大書院、宝塔、山を背景とした池ある大庭園更に藩主歴代の豪壮なる大墓碑に参拝して、幽邃と閑静と云う事をつくづく思う。寺を辞して昨年十一月復元竣工したる『岡山城』に至る。水を湛えたお濠を前に見上ぐる城は中々に美しい。車を返して廻遊式庭園で日本三公園の一と言われている『後楽園』に入る。新緑燃ゆる所風薫る広い園内を思い思いに散策した。そして此所で一行の記念撮影もした。園を出て市外にある『黒住本庁』に参拝する。わざわざ門前に出迎え下さつたご厚意に一同感謝しつゝ礼拝して後大広間にて昼飯とした。そのあとにて

大元学院末谷講師の一場の講話を聞く、誠に結構なお話であつた。かくて我等の車は二時本庁を出発、市を離れて児島湾開拓地に行く。淡水と海水を遮断した大堤防上をドライブ、実によい気分になつて「金甲山」に登る。山は予想以上に高く車の登るのに冷汗を覚ゆる所も多かつた。山頂はよく整備されてテレビ塔もあり、ヘルスセンターもある。眺望は実に豪快で三十八嶋を展望せらるゝと言われて居る。こゝで一同ゆつくり休憩して四時すぎ山を下り、岡山駅前で少憩して、山崎帰着は七時すぎであつた。

雑報

★ 山崎町の老人ホーム建設地が五十波地区に決定した。総面積五六〇〇平方米で工費二千六十一万円。長水城主の陰居所と称されて昔は堀をめぐらした高台の畑地、天正時代には宇野政頼の構であつたところ。敷地三三〇〇平方米で環境は申分なしのところである。

★ 遠藤島生は山崎藩主「本多家物語」を八月から山崎新聞に連載中、相当長篇になる見込の由

★ 山崎閤斎神社の夏祭りは、七月三十日執行され、町長始め奉賛会長、町議長、郷土会役員ら多数参列された。

★ 本会秋の見学旅行は、九月十七日天橋立方面に行きます。詳細は近日御通知しますから御協力下さい。

会員名簿(23)

西町　坂本竹夫
〃　中西ふじゑ
東鹿沢　橋本嘉二夫
〃　後藤ふみ子
出水町　小倉利八
中鹿沢　井上つるよ
今宿　藤原信太郎
〃　杉本数一
山田　橋本忠雄
中広瀬　塩見あさよ
〃　山本恭子
高校　鎌田裕明
三津　北川かね
〃　三岡ますゑ
〃　東久子

一宮町　門積保
〃　中尾幸治郎

豊かなくらし創りに奉仕する
プロパンガス
器具のデパート
ホンジョウ
山崎町東和通
TEL. 六五六(代)